

『宝の法則』

喜んでささげるための6つの鍵

ランディ・アルコーン

「宝の法則」

タイトルがいい。「お金についての聖書の教え」などという題なら、読者数は半減しただろう。「言われなくても分かっているよ、また献金の話だろう」と、憎まれ口をききたくなくなってしまう。

著者は、かつて牧師をしていた時、「生まれていない子どもの命を守る」という信念に従って行動したために、中絶手術をしている医師たちから裁判に訴えられて敗訴し、840万ドルの支払いを命じられるという逆境に追い込まれた。教会が債券差し押さえ令状を受けたため、教会を守るために牧師をやめた。しかし、そのことでむしろ、「天の下にあるものはみな、わたしのものだ」(ヨブ41章11節)というみことばの意味を理解できたのだという。

「喜んでささげるための6つの鍵」とは、以下の通りである。

- 1 神がすべての所有者であり、私は神のお金の管理者だ
- 2 私の心はいつも、神のお金を置いてある場

所にある

- 3 私の故郷は天国で、この地上ではない
- 4 点(地上)のためではなく、線(天国)のために生きるべきである
- 5 物質主義に陥らない唯一の方法はささげることである
- 6 神が私たちに与えて下さるのは、生活の水準を上げるためではなく、ささげる水準を上げるためである

これらはすべて、聖書から導き出される原則で、具体的な実例でも裏付けられている。著者は、これらの原則に従って生活した結果、家を失うことも、一家離散することもなく、むしろ今では、本の印税の90%を宣教の働きにささげることができるようになったという。

「お金はきかないものだ、お金の話はしたくない」「収入の十分の一を献金してしまったら、生きていけない」「十分の一は神のものかもしれないが、十分の九は自分のものだ、勝手に使わせてもらう」クリスチャンでも、どこかでこんな思いを抱いているのが現実ではないか。「米国のクリスチャンは、平均で収入の2〜3%しかささげていない」という。日本でも大差がないのかもしれない。しかし、このままでいるならあまりに寂しいことではないか。

『宝の法則』に隠された喜びをひとたび発見したら、この喜び以下のもので満足することはでき

なくなる。それは保証できる」(序文より)

本書は、机上の空論ではない。現実に行き詰まり悩みに悩んだ人が、最後にたどり着いた「宝の法則」である。お金について、これほどに深く、また分かりやすく教えてくれる本がほかにあるだろうか。

本書の最後には、「解放を得るための31の質問」という章があり、「喜んでささげる法則を、どうしたら伴侶や子どもたちと共に実行していけるでしょうか?」という質問に、みことばからの応答がなされている。夫婦で手に取って読みたいくなる本の一つである。

「私は多くのものを握りしめ、そしてそれらを全部失った。しかし神の手にお渡ししたものについてはすべて、ずっと持ち続けている」(マルティン・ルター)

(評・前島常郎)



(いのちのことば社 B6判
159ページ 1,400円+税)